

〔共通事項〕を視点に、思考力・判断力・表現力の育む授業づくり

—美術科における思考力・判断力・表現力を育むための言語活動—

美術科は、創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化について理解を深め、豊かな情操を養うことを目標とする教科である。豊かな情操とは、美しいものやよりよいものにあこがれ、それを求め続けようとする豊かな心の働きである。様々な創造活動を通して、表したいことを表すために思いを巡らせたり、よさや美しさなどを感じ取り味わったりするなど、思考力・判断力・表現力の高まりが豊かな情操を養う上で大切な要素になると考える。本校美術科では、この思考力・判断力・表現力を育むために有効な「言語活動の充実」について考えていきたい。

I 美術科の学習で育む力

美術科の学習は、生徒一人一人が、豊かに発想や構想し、創造的な技能を働かせたり、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り味わったりするなどの創造活動の過程を重視し、「何をさせるのか」ではなく、「何を育成するのか」ということを起点にした授業づくりが求められている。美術科とは、このような学習を積み重ねることによって、「生きる力」を育むための、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を身に付け、形や色彩などによって自己や他者、社会とつながる創造的な体験の中で感性を豊かにし、自己の世界として意味付けをすることで自らの夢や可能性の世界を広げていくことから、豊かな情操を養うことを全ての生徒に実現することを目指した教科であり、これらの能力を育むことが美術科の目標である。

II 美術科における思考力・判断力・表現力

1 〔共通事項〕について

美術の創造活動は、表現活動と鑑賞活動とがある。現行の学習指導要領には美術科の内容として「A表現」、「B鑑賞」及び〔共通事項〕から構成されると示された。「A表現」は、主体的に描いたりつくったりする表現の幅広い活動を通して、発想や構想の能力と、創造的な技能を育成する領域である。「B鑑賞」は、自分の見方や感じ方を大切にしながら主体的に造形的なよさや美しさなどを感じ取り味わう鑑賞の能力を育成する領域である。そし

て、〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の学習において、共通に必要な資質や能力であるとともに、美術における思考力・判断力・表現力を育む上で柱となる資質や能力でもある。2つの領域の指導を通して、形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情などに意識を向けて考えさせたり、対象のイメージを捉えさせたりすることで、「どんな形や色にすると楽しい感じがするだろうか」、「この作品からやさしい感じがするのはなぜだろう」などの疑問を、形や色彩、材料などの要素とそれらがもたらす感情やイメージを関連付けて考え、根拠をもって表現することにつながる。また、美術のよさや美しさなどを造形的な要素を根拠として、より深く感じ取ることもつながる。そのためには形や色彩、材料、光など、それぞれの要素に視点を当て、対象を構成する要素を整理し、そこから温かさや軟らかさ、安らぎなどの性質や感情を具体的に感じ取ったり、イメージしたりするための指導の手立てが必要となる。また、一つの題材の中で同じ〔共通事項〕を基にして、形や色彩、材料などの性質や、それらがもたらす感情などに着目して鑑賞活動を行い、さらに、発想や構想をする表現活動を行うなど、〔共通事項〕を視点に表現と鑑賞の活動を関連させることにより、表現や鑑賞の能力は効果的に育成される。

2 表現領域における思考力・判断力・表現力

先述の通り、「A表現」は、主体的に描いたりつくったりする表現の幅広い活動を通して、発想や構想の能力と、

創造的な技能を育成する領域である。表現の能力を一層豊かに育成するために、〔共通事項〕を視点に形や色彩、材料などに対する感覚などを豊かに働かせながら、対象を見つめ、生徒一人一人が感じ取ったことや考えたことから主題を生み出したり（自己に関すること）、客観的な視点で目的や条件、機能と美の調和などを考えたりする（他者や社会に関すること）など発想し、それらを基に表現したい内容をどのように表すか構想を練り、意図に応じて材料や用具、表現方法などを自由に工夫して表現する過程を大切にす。このように表現の学習は、表現したいことを基に、思考・判断・表現する創造的な課題解決の学習そのものであり、特に、発想や構想に関する項目が思考の中核を成している。

なお、平成22年3月「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」において、「評価の観点である『思考・判断・表現』の『表現』は、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動等において思考・判断したことと、その内容を表現する活動とを一体的に評価することを示すものである」と示されている。そこから、美術科の表現領域における「表現力」とは、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、表現活動において発想・構想したことを、言語活動を通じて表す力としての「表現力」と、発想・構想したことを基に、創造的な技能を働かせてつくりだす、美術科本来の「表現力」があると考え。思考力・判断力・表現力を育むことで、主体的に創造活動に取り組む態度が養われるようにし、創造的な技能を働かせてつくりだそうとする美術科本来の「表現力」につなげていきたい。

3 鑑賞領域における思考力・判断力・表現力

「B鑑賞」は、感性や想像力を働かせて、自然の造形の美しさや、人類のみが成しうる「美の創造」という素晴らしさを感じ取り味わい、自らの人生や生活を潤し心豊かにしていく主体的で創造的な学習である。これは単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識などを活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくりだす学習である。鑑賞の学習の本質とは、自然や生活の中の造形、美術作品など

から、自分の見方や感じ方を大切にし、自分の生き方との関わりの中で対象を見つめることによって感じ取り味わい、自分なりの意味や価値をつくりだす。そして、そう感じた理由や、形や色彩、材料などの要素を様々な角度から見つめ洞察的な思考を重ねたり、他者との言語活動を通して自分の見方や考え方を広げて追究したりすることによって、より幅広い生きた知識を身に付けるとともに、対象から美術や工芸そのものに対する感動と理解を一層深めることができるようになることである。このように、鑑賞の活動において自分の中に新しい価値をつくり出していくために、言語活動の充実を図る必要がある。まずは一人一人が対象と向き合い、自分なりの見方や感じ方をもち、その過程において説明し合ったり批評し合ったりするなどの言語活動を行うことで、漠然とした感じ方が言語活動によって整理され、より自分の見方や感じ方を深めたり、他者の見方や感じ方から自分にはない見方や感じ方に気付くことにつながるのである。

II 美術科における言語活動

1 美術科における言語活動の意義

美術科では、表現や鑑賞の能力を育成する観点から、〔共通事項〕を柱に形や色彩、材料の感情効果やイメージなどを捉えながら、アイデアスケッチ等により発想や構想を練ったり、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして幅広く味わったりするなどの学習活動の中で適切に言語活動の充実を工夫する必要がある。

ところで、言語活動の充実を考えていく上で、美術科における「言語」について確認しておきたい。美術科における言語は、「文字や音声による言語」と、「形や色彩、イメージによる視覚言語」がある。後者においては、特に美術科の特質において、主要な要素として取り扱われてきた事柄であり、これまでも意識して学習を展開してきている。ただ、ここで大切なのは、「形や色彩、イメージによる視覚言語」と、「文字や音声による言語」の双方を関連させて考えていくことにある。自然や生活の中の造形、美術作品などの視覚的に感知されるものや人々の

内面及び感情は、なかなか「言葉では捉えにくい」、「説明しきれない」ものである。さらに、これまでの美術の学習では作品の質を高めることに指導の重点が置かれ、あえて「文字や音声による言語」活動を避けてきたというところもある。そのために、表現の活動では作品制作の意図が不明確、もしくは独りよがりなものに留まったり、鑑賞の活動では、見る視点が曖昧で思いや考えに根拠がなく単なる感想にとどまるといった状況に陥ったりするなど、美術の学習が深まらないことがあったのではなかろうか。

「形や色彩、イメージによる視覚言語」という曖昧で抽象的なものを、「文字や音声による言語」化することで、誰もが共有できるものとして一般化することができる。つまり、形や色彩、イメージから成る美術の世界だからこそ、言葉で説明することにより、自己の表現をより明確にするとともに、他者に理解されるよう伝えることができるということである。美術の創造活動の中に言語活動を意識的に取り入れていくことにより、さらに美術科のねらいに迫ることができる考える。

ここで、「中学校学習指導要領解説 美術編」を基に、滋賀大学新関伸也氏によりまとめられた美術科における言語活動の意義について以下に示す。

美術科における言語活動の意義

- 言葉によって、形や色彩、材料などの造形を捉えるための視点が明確になり、また、新たな概念がもてること。
- 言葉によって、自分の感じ取ったことや、考えを整理し、明確化することができること。
- 言葉によって、他者と話し合ったり、説明し合ったりすることで学びを共有化し、自分の見方や感じ方を深めたり、広げたりすること。

以上の通り、表現や鑑賞の学習を充実させるために、言語活動の意義を意識して活動を取り入れていくことが必要である。

2 美術科における言語活動の充実

本校では、言語活動の充実とは、「授業実践において生徒が行う言語活動の質を高め、確実かつ効果的に生徒の学力を高めること」であると考えている。それでは、「言語活動の質を高める」とは、具体的にどうすればよいのだろうか。本校美術科では、以下のように考える。

(1) 言語活動を充実させる具体的な学習活動の観点から授業改善を試みる

美術科における言語活動を充実させる具体的な学習活動として、「言語活動の充実に関する指導事例集」を基に滋賀大学新関伸也氏がまとめた表を次に示す。

※（ ）内が美術科の言語活動を充実させる具体的な学習活動にあたる

言語活動を充実させる具体的な学習活動

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
(感じ取ったことや考えたことを言葉に置き換える)
- ② 事実を正確に理解し伝達する
(デザインなどにおいて図やサインなどの視覚言語に文字言語を加え事実を正確に伝える学習)
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする
(美的法則性のある表現方法を活用して作品制作したり、鑑賞において表現意図を解釈し説明したりする活動など)
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
(鑑賞において、自己の価値観に基づいて評価や批評する活動)
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
(スケッチや言葉などを基にアイデアを練りながら制作する。さらに完成した作品を鑑賞したり、自己評価したりする一連の活動)
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
(共同制作や鑑賞などにおいて、作品に対する考え方を伝え合い、互いに深めていく活動)

以上のように、これらの学習活動を言語活動の充実のための指導の観点として意図的に仕組んでいくことで、思考力・判断力・表現力を含む美術の基礎的な能力を育む質の高い言語活動になると考える。

(2) 【共通事項】の視点を生かす

前述の(1)の学習活動において基盤となるものが【共通事項】である。

自然や美術作品などからよさや美しさを感じ取り、そう感じた理由を相手に伝えたり、自分の思いや意図について説明したりするとき、きちんと相手に伝わるようにするために必要となってくるものが、共通の視点や言葉である。自然や美術作品などのよさや美しさ、自己の思いといった言葉では言い表しにくい「曖昧なもの」を形や色彩、材料などを視点に捉え、それらがもたらす感情やイメージを関連付けて、「同一のトーンの配色で落ち着いた印象がする」や「丸みのある形と表面が滑らかで柔らかい感じ」などと共通の認識の言葉を使うことで、「曖昧なもの」を浮かび上がらせることができる。それは同時に根拠のある表現を生み出すことにもなる。生徒同士が互いの思いや考えを伝え合い、深め合うには【共通事項】の視点を生かすことで大きな効果を生むと考える。また、そこには生徒自身の見方や感じ方を大切にすることも重要になってくる。

(3) 学習形態の工夫

前述の(1)の学習活動において、適切な学習形態を工夫することも必要である。学習形態の例としては、個別学習やペア学習、グループ学習、一斉学習が考えられる。自分の中で思いや考えをまとめる場面、互いの思いや考えを伝え合う場面など、この活動でどんな力を付けさせたいのか明確にした上で、効果的な学習形態を考えていくべきである。また、教師は様々な学習形態で出てきた生徒の言葉を受け止め、生徒の思考を促す上で有効な言葉などを全体に広げることで、全ての生徒の学習活動の質を高めるよう指導していくことが必要であると考える。

(4) 言語活動の適切な評価（見取り）

言語活動の質を高める上で必要となることは、生徒が

言語活動を通して思考力・判断力・表現力を含む美術の基礎的な能力を付けてきているか、「言語（表現物）」から思考の様相を見取り、「付けたい力」の高まりが見られない生徒に対して即時に手をさしのべることであると考える。そのためには、生徒の思考の様相を想定し、生徒がどのような表現をすれば十分であるのか判定する基準をもち、不十分であればどんな手をさしのべるのか考えておく必要がある。

Ⅲ 実践事例

【実践例①】

題材名

「私、こういうものです。—自分を伝えるデザイン—
(2年生)

【A表現(2)イ,(3)ア】【B鑑賞(1)ア】

次	主な学習内容	配時
1	○「名刺とは何か？」を学ぶ ・名刺の役割と力について学ぶ ○「自分分解」 ・「自分」のイメージマップづくり	1
2	○伝えたいことが伝わる名刺のデザインを考える ・名刺の構成を考える ○アイデアスケッチの検討をする ・グループでアイデアスケッチを検討	2
3	名刺を制作する ○アイデアスケッチを基に名刺を制作する ・材料や表現方法を選択して制作	2
4	名刺の鑑賞をする ○名刺交換のマナーを学び、名刺交換する ○相互鑑賞 ・互いの作品を鑑賞し、分かりやすく、興味をひく表現や工夫を感じ取る	1
課外	名刺を手渡す ○職場体験の訪問先で名刺を手渡す	課外

1 指導上の工夫

(1) 現実社会へつながりのある題材

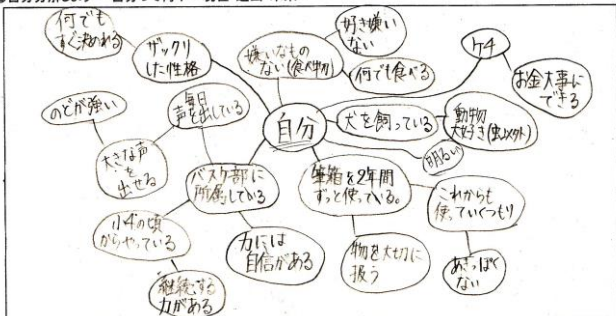
この題材は、2年生で行っている職場体験に向けて、事業所の方に自分について伝える名刺を作ることを目的としたものである。実際にお世話になる事業所の方に、自らの手で渡すものなので、生徒はより意欲的に取り組むと考えた。また、相手に伝えたい自分を伝えるという明確な課題があり、その課題解決のために何を、どう工夫していけばよいか積極的に考える動機付けにもつながっていったと考える。

(2) 思考の流れに沿ったワークシートの利用

第1次では、自分の性格や特徴、特技などを再認識するために、イメージマップを用いて自分分解を行った。とにかく思いっただけ記入させることで、普段あまり意識しないような事柄も浮かび上がり、自分を構成する要素が見えてきた。そして第2次では、第1次で見えてきた要素のうち、渡す相手に特に伝えたい自分の要素を自己PRとして抜き出させ、それをさらにキャッチコピー化した。キャッチコピーとは自己PRをより端的に分かりやすく表したものである。こうすることで、生徒が相手に伝えたいことをより明確にできるとともに、生徒の考えも整理できると考えた。ここまでを行った上でアイデアスケッチへと入っていった。アイデアスケッチでも、スケッチだけではなく、相手に伝えたいことを分かりやすく伝えるための工夫について言葉でも記入させ、どのような工夫によって何を伝えるのか、ねらいと工夫が一致するように考えさせるようにした。このように思考の流れに沿ってワークシートの内容を構成しておくことで、生徒は誰に何を伝えたいのか、どうやって伝えるのかなど、目的を意識してアイデアを練ることにつながった。

▼イメージマップ(自分分解)

②自分分解しよう...自分って何?~現在・過去・未来~



▼自己PRとキャッチコピー

自己PR...自分はどういう人間なのか、自分のできることは何なのか
相手に伝えたい「自分」とは? 前回のプリントを参考に考えよう。

明るく、ガツクリに性格で何でもすぐ決められる。

そして、自己PRをギュッと濃縮したのがキャッチコピー!

クッキーのようにガツクリに性格。

▼アイデアスケッチ

伝えたい「自分」を伝えるために工夫すること

情報をわかりやすく伝えるために工夫すること

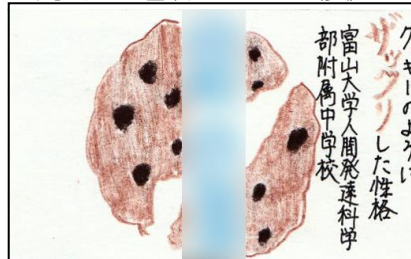
「ガツクリ」を大きくして目立たせる。
クッキーを割れている感じにして、より「ガツクリ」を伝える。

絵を入れることで、少しユーモアある感じを出す。
前朝休にして、少し、かりした(やる気はやる感じ)かんじにする。

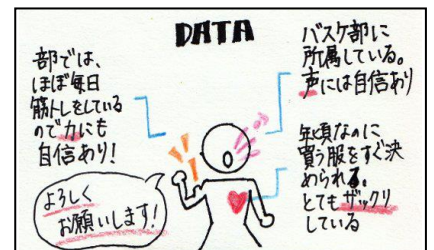
絵を入れることで、少しユーモアを入れる。
明るいことを表現するために周りを明るい色でかこう。フワフワさせる。

明るいことを表現するため、明るい色でかこう。上半身のみ(=し)文字大きく

▼完成した名刺 (表)



(裏)

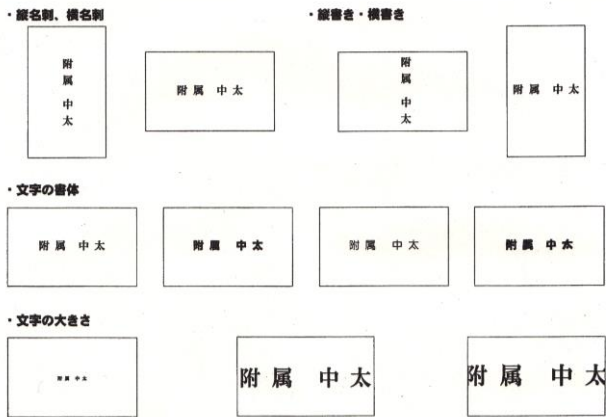
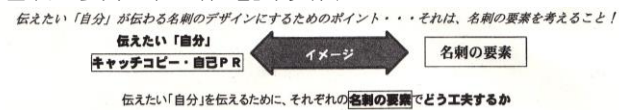


(3) 必要な資料・材料の充実

アイデアを形にしていくためには名刺の要素をしっかりと理解した上で、自分の意図に応じて選択して表現していくことが大切である。また、美しく仕上げるためには制作の順序を考え、見通しをもって作っていくことも必要である。そこで、名刺の要素をまとめた資料を配布

したり、制作の手順を掲示したりするなど、生徒がアイデアを練ったり、制作する上で手がかりとなる資料を充実させた。また、名刺用紙は和紙、画用紙、ケント紙の3種類を用意し、描画材料は鉛筆、ミリペン、ボールペン、サインペン、筆ペン、パステル、クレヨン、色鉛筆、アクリルガッシュ、いろいろな色のマスキングテープなどを用意して、生徒の意図に合わせて選べるようにした。明朝体を使って真面目な感じを出す、優しい感じを出すために和紙やパステルを使うなど、形や色彩、材料とそこから感じられる印象を関連付け、明確な意図をもって工夫している姿が見られた。

▼名刺の要素（一部）配布資料



▼いろいろな描画材料（一部）



（4）グループでのアイデアスケッチの検討

第2次の後半では、4人グループで代表者のアイデアスケッチを基に、その生徒が伝えたい内容を相手に分かりやすく、美しく伝えるにはどのような工夫をすればよ

いか話し合い、互いに共通に感じる形や色彩などの印象や感情効果を考えて名刺のデザインを見直していった。この話し合いから、自分の思いや意図と文字の書体や大きさ、配置、材料、色彩などの効果との関連性に気付き、伝えたいことが伝わる表現にするためには、何を、どんな効果をねらって、どう工夫するか明確にして構想をまとめることにつながると考えた。各グループで検討した内容はOHCを利用して全体場で発表し、相手に伝えたいことを分かりやすく伝えるために工夫すべき視点や工夫の内容、その効果について共通理解することができ、個々のアイデアスケッチの検討の視点とすることができた。話し合いから得た視点で文字の配置や色の変更などをする生徒が見られ、話し合いに意義を感じている生徒も見られた。

2 本題材での言語活動の充実

この題材で充実させる言語活動

（丸数字の項目は「言語活動の充実に関する指導事例集」の言語活動を充実させる具体的な学習活動の項目に対応する）

③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする

：文字の書体や大きさ、配置、材料、色彩など名刺の要素を活用して、工夫点を言葉でまとめたり、その工夫点に従ってアイデアスケッチしたりする。

⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

：自分の表現意図を基に文字の書体や大きさ、配置、材料、色彩とその印象を関連付けて、アイデアを練りながら制作する。

⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

：作品についてグループで検討し、検討したことを全体で発表して共通理解し、互いに深め合う。

3 成果と課題

①思考の流れに沿ったワークシート

デザインの授業において、伝える、使うなどの目的や機能を考えることは必要なことである。本題材では、

誰に何を伝えるのか、どうやって伝えるのかという内容を、生徒が順を追って丁寧に考えていけるようなワークシートを構成した。また、アイデアスケッチでは、伝えたい自分を伝えるために文字の書体や大きさ、配置、材料、色彩などをどう工夫すればよいか、それはどのような理由なのかを明確にできるよう、「自分の伝えたいことを伝えるための工夫」と「分かりやすく伝えるための工夫」という2つの点で考えさせ、言葉で記入することで、生徒の意図が明確になるとともに、生徒の思考・判断の過程が見え、思考の質を見取る上でも有効であった。

②グループでのアイデアスケッチの検討

相手に伝えたい自分が伝わる名刺のアイデアスケッチになっているかグループで検討したことは、伝えたい内容と、多くの他者が共通に感じる形や色彩、材料などの効果から感じられる印象などをつなげて考えていく上で効果的であった。また、前述のとおり、ワークシートにはどんな自分を伝えたいのか、伝えるためにどのような工夫をしていくのか言葉で書いていたこともあり、作者の思いや表現意図を汲み取ることによって検討する内容を明確にして話し合うことができていた。グループでの検討の後、検討したことを全体にも発表することで、伝えたい自分を伝えるためにより効果的な工夫について互いに共有することができ、それぞれの作品にも活かそうとする姿が見られた。

③言語活動を通じた見取り

これまでに述べた通り、思考の流れが見えるワークシートの準備やグループで互いのアイデアスケッチを検討する場の設定など、生徒の思考・判断を可視化していくことを心がけてきた。また、その言語活動がより深まりのあるものになるよう、発想や構想の手がかりとなる資料や材料を充実させてきた。ワークシートを活用してアイデアスケッチに取り組む生徒は、目的を明確にもって創意工夫して制作に取り組む姿が見られた。一方、ワークシートへの記述が不十分な生徒は、どんな自分を伝えたいのか不明瞭なままで、制作では見栄えの良さや材料や技法の面白さなど、付け

てほしい力まで到達できていない姿もあった。思考の様相を見取った後、どのような助言をするか具体的に想定しておくこと、適切な手立てを選べるよう整理しておくことが必要である。また、発想や構想の段階こそ、丁寧に進めていく必要があり、一つ一つをクリアしていくことで曖昧なものが形作られていく。授業時間は限られているが、そういった視点を生徒に意識させることが大切である。

【実践例②】

題材名 「どんな世界？『クリスティーナの世界』」

(1年生)

【B鑑賞(1)ア】

アンドリュー・ワイエスの「クリスティーナの世界」を鑑賞し、描かれているものやそこから感じられることなど、生徒同士が対話しながら作品について考えを深めていく題材である。この題材を通して身に付けさせたい力は、以下の通りである。

- ・形や色彩などの特徴や印象などをから、作者の心情や意図、表現の工夫などを感じ取り、自分の思いや考えをもって作品を味わう力
- ・互いの意見を尊重しながら見方や感じ方を広げ、自分の価値意識を生み出す力

1 指導上の工夫

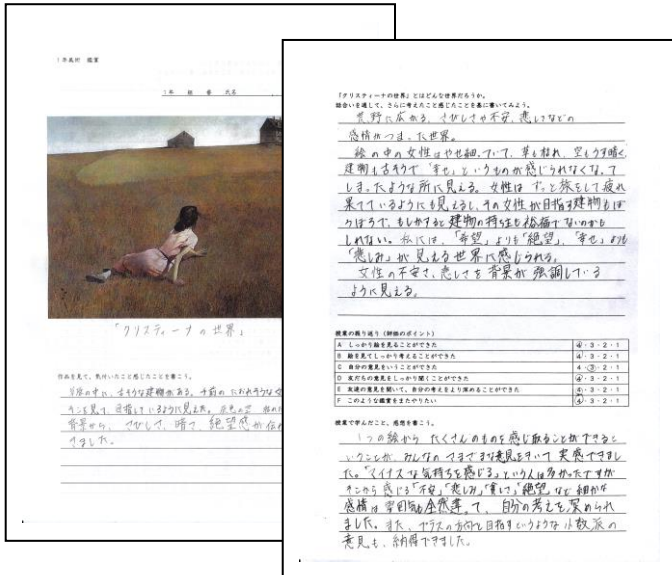
(1) 思考を促す題材

ワイエスの「クリスティーナの世界」は広々とした草原の中に女性が一人座っている情景を写實的に描いた作品である。女性は後ろを向き、視線は遠くにある家へ向いている。よく見てみると「何が起きているのだろうか？」「どうしてこうなっているのだろうか？」と考えさせられる内容となっており、様々な解釈や連想を広げることになり、対話による美術鑑賞を通して、自由に見付けたことやそこから感じ取ったことなど述べ合い、互いの考えを手がかりに作品の見方や感じ方が広がると考えた。

(2) 思考の変容が分かるワークシート

鑑賞を始める前に、個人で作品を見て感想を書き、対

話による鑑賞後にもう一度作品について感想を書けるようなワークシートにした。対話による鑑賞という言語活動を通して、生徒の思考の変容を見取るとともに、生徒自身も言語活動の意義を感じることができると考えたからである。



(3) 学級全体で行う鑑賞活動

今回の授業の形式は一斉学習で行うこととした。相手の考えから作品を見る視点としたり、自分の考えをつなげて深めていったりするためには、小集団による学習より一斉学習が適していると考えた。一斉学習であればより多くの価値に触れる機会となる。しかし、大勢の場で発言することに自信がもてない生徒がいることも事実である。なるべく多くの生徒に発言を促すため、「この絵には何が見えるか」と、平易な発問からスタートした。見付けたことをただ言わせるだけでは深まりのある鑑賞にはなっていないため、対話を進めていく中で、「どこからそう思ったのか」「そこからどう思ったのか」と問いかけをし、生徒の思いや考えの根拠を確かめ、より論理的・体系的な考えを引き出すことを心がけた。また、このような問いかけは言語活動を通じた見取りそのものであり、鑑賞を深めていくために、新たな見方や感じ方に気付かせられるよう言葉を整理しておく必要がある。

2 本題材での言語活動の充実

この題材で充実させる言語活動

(丸数字の項目は「言語活動の充実に関する指導事例集」の言語活動を

充実させる具体的な学習活動の項目に対応する)

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
：作品から気付いたことや考えたことを言葉にする
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり、活用したりする
：形や色などから描かれているものの意味を根拠をもって発表する
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
：作品について自分の価値意識に基づいて批評する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる
：作品に対する考え方を伝え合い、互いに深めていく

3 成果と課題

① 思考の変容が分かるワークシート

対話による鑑賞活動前と後で生徒の記述を比べると、明らかに文章量、作品を見る視点、内容の深まりが、どの生徒にも見られた。授業後の感想にも、友達の影響を聞いて、一つの絵からでもたくさんの事柄を感じ取ることができることに気付いた生徒は多くいた。言語活動を通して自分の考えが深まったことを生徒は自覚できたのではないかと。

▼対話による鑑賞前の感想

作品を見て、気付いたこと感じたことを書こう。
さみしい感じがする。

▼対話による鑑賞後の感想

家の窓のところにはしごがかかっている、くつ下やくつがよごれているため、抜け出して来たんじゃないかと思いました。草のはえ方、色が違うのは、自由と日常の境界線であり、家を見ているのはもう戻りたくないからなんじゃないでしょうか。これらの事から、クリスティーの世界は、自由な世界に変わったんじゃないかと思えます。

↑ 思考の変容が見られる

▼対話による鑑賞前の感想

女の人の格好はピンクのワンピース、足にはこのような草がたくさん生えているところは歩きづらそうな靴を履いていて浮いている。
髪が乱れ、腕・足首の細さ 全体的に寒色の色づかい、左手が家の方向 服が汚れている 家に行きたい強い思い

▼対話による鑑賞前の感想

さんの言っていた服はこの場に場ちがいたのではという意見は私もそう考えていたので納得しました。そとくんが言った身体や服の汚れからだと歩いたのでは、という意見も納得しました。でもあの家は農家の家だとして少し大きいのではという感じがして、ほじと窓が開いているのも気になるので、その子が持っている不思議なあの家は女の子の住んでいる家で外の世界が匂い、外に出たけと、思ってた以上に大変な道のりで帰ってきたと、どっかで待っているのでは、ないか。

↑友達の考えをつながけながら根拠をもち、自分なりに作品を読み解いている

②言語活動を通した見取り

前述のとおり、この鑑賞の授業そのものが言語活動を通した見取りの連続によって生徒の思考を深めていくものである。作品を見てその印象から発言した生徒に対し、どこからそう思うのかと問いかけると、絵の中にある物や動き、形、色などを根拠として挙げていく。その考えを聞き、同じことを根拠にして違う感じ方を発表につなげていく。そのような生徒の姿が見られた。そして、教師が問わなくても、自然と形や色など絵に描かれていることを根拠として自分の考えを語る姿が見られるようになってきた。ただ、やはり全員が発言するまでには至ってはいない。より深く考えを深めていくためには様々な価値意識に触れることが必要である。いかに多くの考えを引き出していくかが今後の課題である。

③拡散的思考から収束的思考へ

この鑑賞の授業は様々な考えが広がっていく拡散的思考に終始した。今後は作品だけではなく作者にも迫っていき、作品の背景にあることなどにも触れ、思考法を用いるなどして様々な価値を整理し、収束的に考えを固めていくことにもつなげていきたい。

IV おわりに

冒頭にも書いたように、豊かな情操を養う上で思考力・判断力・表現力の高まりが重要な要素となっている。

この思考力・判断力・表現力を育むために有効な「言語活動の充実」について、これまで研究を進めてきた。この4年間で見えてきたことは、生徒に言語活動を通してどのような力を身に付けさせたいのか明確な目標をもつことや、そのために言語活動をどのような方法で行い、それをどう見取っていくのかという、当たり前ではあるが、しかし、これまできちんと整理できていなかったことであつた。それを自覚し、言語活動の位置付けを確認できたことは意味があつた。授業の改善から、生徒も、「なんとなく作る」や「なんとなく感想を書く」から「主題を設定し、それを表現するために形や色を工夫する」や「作品の良さを根拠をもって説明する」といった姿が見られるようになってきた。だが、まだ課題は残っている。すべての生徒に思考力・判断力・表現力を育むために今後も研究を進めていきたい。また、魅力ある題材開発も重要である。生徒が「やってみよう」「作りたい」「考えよう」と思える題材があつてこそ、美術への学びへと入っていけると考える。「美術が待ち遠しい」と感じられる授業づくりを今後も押し進めていきたい。

<参考・引用文献>

中学校学習指導要領解説 美術編 文部科学省 H20.9

言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】 文部科学省 H24.6

中等教育資料「中学校美術科における言語活動の充実」村上尚徳 H20.8

同 「美術、工芸の学習を支える言語活動の働き」新関伸也 H23.7

同 「学習指導の工夫改善に生かされ、生徒の学びに働く、学習評価の在り方(28)」東良雅人 H25.11

内外教育 「中学校美術科における授業づくりのポイント」東良雅人 H25.11